「主は報いてくださる」 使徒言行録 12 章 1-17 節

ヘロデ王は、ユダヤ人からの人気を得ようとして、ヨハネの兄弟ヤコブを殺害し、さらに使徒ペトロを捕えました。このとき、エルサレム教会は、十二使徒の中では最初の殉教者となったヤコブを失い、今また最高指導者であるペトロをも処刑寸前という最大の危機に瀕していました。

捕えられたペトロは厳重な警備体制のもとに置かれました。二人の兵士と鎖でつながれ、四人一組の兵士四組によって 24 時間体制で監視されました。このことは、人の力では絶対に脱出不可能であることを意味しています。そのような中、教会では、ペトロのために熱心な祈りが神さまにささげられていました。

彼らの心中は、とても複雑だったと思います。なぜなら、使徒ヤコブはすでに殺されてしまったからです。彼らはヤコブの時は祈らなかったのでしょうか。そんなはずはないでしょう。ヤコブについても熱心に祈ったはずです。でも、ヤコブは殺されてしまいました。けれども、それでも、彼らは神さまに祈りました。ペトロも助からないかも知れないと、どこかでそう思っていたかも知れません。それでも絶望的な状況の中で、教会はペトロのために、彼らに出来るたった一つのこと、「祈る」ということを、心を合わせて熱心にしたのです。

おそらく、誰もが鎖で繋がれ、番兵に監視されているペトロが牢から出てくるなんて、絶対に 不可能だと思っていたかもしれません。でも、彼らは祈り続けていました。祈る、ということは、 神に寄り頼むことです。神の御手にお任せすることです。

キリスト者に与えられている最大の恵みは、どうすることもできない状態にあっても祈ることができる、ということです。私たちは、しばしば「祈ることしかできない」、と諦め口調で言うことがあります。「祈ることしかできない」。果たして、そうなのでしょうか。そうではないと思います。私たちは、絶望的な状況の中でも、なお祈ることができるのです。

確かに、人の思いでは、神は何でも出来る全能の方だと知っていながら、その神の大きな力を知り尽くすことが出来ないので、自分の理解できる範囲で理解しようとしたり、想像したりしてしまいます。さすがにこれは無理だ、と思ったり、疑ったり、半ば諦めたり、不信を抱いたりしてしまいます。私たちの信仰は完璧ではありません。どこか不信仰を宿している信仰です。100%信じ切っているかと言われると、どこかに不信仰がある。そのように私たちは、どこか疑いながら祈っていることがあるのではないでしょうか。祈っていて全部信じて祈っているかというと、やはり「これは無理だよね」と思ってしまう。

私たちの祈りには、不信仰が混じっています。そのことを否定することはできません。けれども、神さまは、そのような私たちの欠けだらけの祈りを喜んでくださり、その祈りを待っていてくださるのです。そして、人の思いを超える神の御心と御業をもって、私たちをそれに与らせてくださるのです。だから、私たちは祈ることができるのです。祈りを妨げる自分の不信仰と戦っていくことができるのです。

詩編66編には、こんな御言葉があります。

「しかし、神はわたしの祈る声に耳を傾け/聞き入れてくださいました。神をたたえよ。神はわたしの祈りを退けることなく/慈しみを拒まれませんでした。」(詩編 66:19-20)

私たちもこの御言葉を口にしながら、祈りに生きる日々を送ってまいりたいと願います。